

ヨハン・ホイジンガのプレイ論に関する 歴史的研究

○杉浦 恭 (筑波大学大学院研究生)

松田義幸 (筑波大学)

キーワード (遊び、夢・理想、文化、精神的価値、物質的価値)

[1] 研究の動機と目的及び方法

人間は、古来より、洋の東西を問わず、物質的価値と精神的価値のバランス、経済的価値と文化的価値のバランスを理想として描いてきた。ところが20世紀に入ると物質的豊かさを重視し、経済的価値が優先され、精神的要素は軽視されてきた。この物質的価値と精神的価値の調和の重要性を考える上で、一つの視点として挙げられるのが、ホイジンガの著した「ホモ・ルーデンス」である。「ホモ・ルーデンス」は、ナチスが精神的価値を軽視したなかで「人間にとって精神的価値がいかに大切か」「人間にとって文化的価値がいかに大切か」の問題意識のもとで考察されたものと思われるからである。

ホイジンガのプレイ論というと「ホモ・ルーデンス」で全てを語る人が見受けられるが、この本が著されるに至った長年のプレイ研究と、彼の生きた時代背景を研究したものは数少ない。そこで本研究ではホイジンガのプレイ論の流れを歴史的に研究すると共に時代背景からの考察も加えることで、精神的価値、文化的価値の重要性を遊びとの関係で考える。研究の方法は、ホイジンガの著作を年代順に調べる文献研究の形式をとった。

[2] 研究の意義

ホイジンガのプレイ論の歴史的流れが明らかになること。また、その中における「ホモ・ルーデンス」の位置づけが明確になること。

ホイジンガのプレイ論を、彼の生きた時代、社会背景とあわせて考えることで、文化及び社会における遊びの重要性が明らかになること。また、精神的価値、文化的価値と、物質的価値、経済的価値のバランスが大切であることがわかること。

[3] 研究の概要

(1) 歴史的な生活理想からのアプローチ

ホイジンガは従来の歴史学の研究方法について疑問を抱いていた。それまでの歴史学が公的の文書だけを頼りに時代像を描いてきたことに対する疑問である。そこで、時代に生きた人びとの生活におけるものの見方、考え方、感受性から時代像をとらえた。

こうして時代を精神の習慣からとらえようとしたとき、人類の歴史には、それぞれの時代に、その時代、その社会にあった生活の理想がみられた。ホイジンガはこれを「歴史的な生活理想」と名づけた。歴史的な生活理想は古代から近代まで、黄金生活、使徒生活(清貧生活)、牧歌的生活、騎士道生活、ルネサンス的生活、バロック的生活、ロココ的生活、ロマン主義的生活という流れでとらえることができる。

どの時代の理想にも共通していえるのは、人間は美しく生きたいという願望をいつももっていたことである。しかし、その美しく生きたいという理想を現実の生活の場で実現することは難しい。そこで、遊びを通して、理想を現実の生活で実践したのである。歴史を

振り返ると、どの時代にも生活理想のなかに共通の要素として遊びがみられる。理想はいつも遊びによって表現されてきたといえる。ホイジンガが遊びを考えるようになるきっかけはここにあるといってもよいだろう。

(2) ホイジンガのプレイ論と文化観の流れ

ホイジンガは遊び自身が、夢、理想を表現する方法として文化を形成してきたことに気づいた。文化は、夢、理想が遊びを通して表現されたときにすでに存在していたといえる。逆にいえば、遊びなくしては文化は存在できなかったのである。

ホイジンガの文化観には1930年代を境にして変化がみられる。1930年代以前は、前にも述べたように、文化はいかにして形成されるか、あるいは、文化の本質はなにかといったテーマが主であった。ところが、1930年代以降になると、文化はいかにあるべきかに関心が移る。これは、文化の記述的研究から規範的研究への移行である。なにゆえ文化の規範的研究へ移ったのであろうか。これはナチスの影響によるところが大きい。文化の条件として、愛、倫理、秩序、義務といった道徳的、倫理的内容を全面にだして述べるのは、ナチスが倫理を無視し、人びとの生活のなかから夢、理想を奪いとったからである。倫理が及ばなくなり、崇高な理想を失った社会は、文化を衰退へ向かわせると考えたのである。

(3) ホイジンガのプレイ観と時代、社会背景

1930年代の西欧はナチスの支配した社会である。ナチスは新しいもの、より進んだものを追求する傾向にあったため、ことさら科学技術に力を入れた。物質的価値ばかりを追求し、精神的価値をおろそかにしたのである。これは、生活の便利さと結びつき、工業化を追い求めることになる。働くことが善であり、遊びは悪と考えられるようになる。人間は働くことだけに専念させられると、全般的に判断力、批判能力の低下を招く。精神的な活動、自ら創造する機会がなくなると、思考能力が低下するからである。すると、正しくないことでも間違っていると思わなくなってしまうのである。その意味で、遊び（自由な精神的活動、創作活動）は、文化の形成だけでなく、人間の倫理観の形成にも一役かっているといえる。ホイジンガは精神的価値、遊びを軽視したナチスを見て、文化の危機と同時に人間性の喪失を感じたのである。文化は国家によって方向づけられるものではない。

[4] 結 論

ホイジンガは、人類の歴史を記述的研究からみたとき、どの時代にも遊びに彩られた崇高な夢、理想が存在していたことに気づいた。これが文化を形成してきたのである。文化は、「夢、理想→シンボル化→遊び→文化表現形式」のコンテクストがその背景にある。ところが、1930年代に入り、生活のなかから遊びが奪われ倫理が及ばなくなると文化を規範的にとらえるようになる。これは物質的価値、経済的価値のみを追求するナチスに文化の危機を訴えるためである。こうして遊びと文化を記述的、規範的に研究して著されたのが「ホモ・ルーデンス」である。ホイジンガのプレイ論は以上のような経緯をとっている。

[5] 展望

20世紀の社会は物質的価値の追求、経済的価値の追求を第一義としてきた。しかし、今後はいかに精神的価値、文化的価値とバランスさせていくかが課題である。崇高な夢、理想をシンボル化し、文化に表現することは、人間の人間たるゆえんといえるからである。